

今号の  
表紙作家

## 人間万事塞翁が馬、 陶芸万事塞翁が馬



### 樽沢泰文（高24回）

●たるさわ、やすふみ

飯田市龍江生まれ。東京藝術大学、大学院で人間国宝、藤本能道、田村耕一、浅野陽に陶芸を学ぶ。銀座むね工芸にて工芸研究を経て、1985年茨城県つくばに陶房を開設。日本橋三越、大阪高島屋、ギャラリイ等全国各地で個展、茨城県陶芸美術館企画展等開催。北関東陶芸展華大賞受賞。著書に『陶芸を楽しむ』（日本ヴォーグ社）。現在、美術の森・彩遊舎主宰、池袋コミュニティカレッジ講師。長唄今藤流家元。日常食器から花器、オブジェ等、作域は広い。

【美術の森 彩遊舎】

<http://www.tjutsunomori.com/>

「焼きものは、窯を開けるまでわからない。陶芸の難しさ、そして取りつかれる魅力って、それだと思う。何十年と、窯出しまでの神に祈るような気持ちは、変わることがない。

自分は、幼い頃から絵が好きで、独りになると何かしら描いていた。描くことで精神が自由になる喜びを感じていたのだと思う。自由がどんなものなのか掴みようがないが、解放されていく世界が、自分にとってまたまアートだったのだ。

陶芸を始めたのは、大学時代に遡る。芸大陶芸科の教授陣は、色絵磁器の藤本能道、鉄絵銅彩の田村耕一、そして食と器の浅野陽という当時工芸界をリードする錚々たる面々だった。モノを作るのが好きだということと、それで飯を食っていくということとは違う。先生方の背中を見ながら、そういうプロの厳しさもプライドも教わったような気がする。しかし、卒業までに覚えたことは、灰のあく抜きと窯焚き、酒とカツオ

の叩きぐらいだ。

「テクニクは教えられるが、品性というやつは教えられんからなあ」

「樽沢さんはね。人柄はいいけどねえ……。でも最後はやっぱ、人柄よ……」

喜んでいいのか悪いのか、あちこちで毒気のある言葉に励まされ、暗中模索、彷徨の青春時代だった。陶芸は失敗や無駄がモノをいう非合理の世界だ。まさに敗者復活の人生そのものだ。

群れから離れて「何でも屋」と言われてきた私の目下のテーマは、媒体としての「土」である。釉薬でもない土でもない「中間層」に着目して制作している。ストイックに続けてきた陶芸も楽しくなってきた。やっと自由が手に入りかけたのかもしれない。



南伊地区在住の24回生20名程からなる、新しい農業を考える会「農業塾 Next」では、2015年から毎年、自前の本格焼酎「kasabiyaki」を作っている。そのパッケージデザインを担当。